

終局性・定常性から文法化へ：所有動詞に関する考察

0. はじめに

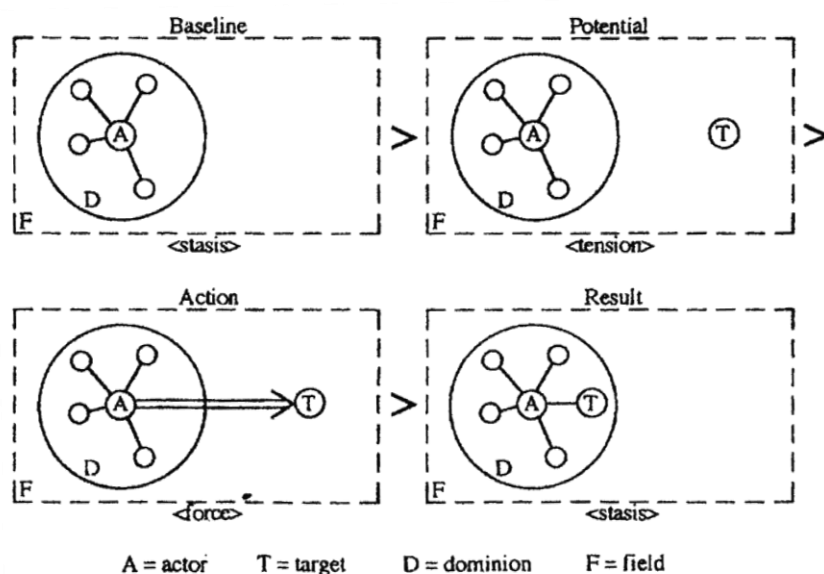
本発表は、所有表現に使用される動作動詞や存在動詞について、各動詞が所有関係を表すにいたった経緯を「コントロール・サイクル」(Langacker 2002)などの認知モデルを援用しながら、主観化(subjectification)との関連をふまえて認知文法的に考察するものである。対象言語は英語及び日本語とし、動作動詞に備わる「終局性」「定常性」と文法化の関係を論じる。

1. 動作動詞:have と「持つ」

「(手に) 持つ」などの動作を原義とする動作動詞が所有表現に使われる場合、言及可能な所有対象が多様化すると同時に原義は薄れていく。英語の **have** はさらに文法化が進んでアスペクトを表すに至っている。一方、日本語の「持つ」は文法化が進んでおらず、「-ている」を伴い「<所有者>が<所有対象>を持っている」という形で所有関係を表すが、「持っている」構文を使って言い表すことのできる所有関係も存在型の構文に比べて少ない。同様の原義を持ちながらも、両者の間には以上のような違いがある。

have の文法化については多くの研究がなされており、Bybee et al. (1994)は **have** の完了相としての用法が結果構文から発達したことを示している。

Langacker(2002)は「baseline」「potential」「action」「result」の4段階から成る認知モデル「コントロール・サイクル」(図1)を論じる中で **take**, **grab**, **snatch**, **seize** などの perfective 動詞と **have** を区別し、imperfective 動詞である **have** は4段階のうち **result** 段階を表す傾向が強く、無界的な静態の継続を焦点化している。



Langacker (2002)

(図1)

Carey(1995)は、have の結果相から完了相への変化は、結果の概念が客観的要因に左右されず話し手ベースになるという点や言語的にコード化された主体ではなく概念化者との関連から捉えられるようになるという点においてTraugott(1989,1995)やLangacker(1990)の「主観化」の反映であると指摘している。

一方、日本語の「持つ」は有界のイベントを表し、action 段階に焦点を当てる傾向がある。(例文1)

- (1) a. レストランに行くときは、大きなバッグを持っていますかないのがマナーと言えます。
もし仕事帰りなどで大きなバッグを持っていまするときには、ウェイターやクロークに預けます。コート類も同様です。(幸運社編『女のマナー常識 555』より)
- b. 「... 大森の家だつて二人だけの有(もの)だと思つてゐると大変な間違なんです。
それはあの家を持ったのは二人ですけれど、あれを家らしく住み心地の好いやうにしたのは私ですもの、...」(徳田秋聲『灰燼』より)

2. 「終局性」「定常性」と主観化・文法化

以上のように、主観化や文法化に際しては、動作の終局が焦点化される「終局性」や状態の継続を示す「定常性」が鍵になっていることが推察されるが、なぜそれらの特性が主観化・文法化に結びついていくかについては十分な議論がなされていない。

実際に場面を捉える際には、物理的な動きのあるものについては客体の動きを時間の進行に従って目で追うのが自然である。それに引きずられる形で心的アクセスも客体の動きをたどることになり、概念化者の物理的・心的視点は客体の動きに委ねられるところが大きい。しかし、いったん動作が終局を迎えれば、概念化者の心的視点に従って対象間の関係や全体像を把握することが可能になる。つまり、前者は Langacker(1987)の順次的走査(sequential scanning)で捉えるのに対し、後者は総括的走査(summary scanning)に近い状態で捉えることができる。総括的走査に近い状態で全体像を把握することにより概念化者の心的アクセスが自由化され、主観化を促すというのが本発表の主張である。

result 段階を焦点化する have の文法化が進んでいるのに対し、action 段階寄りを焦点化する「持つ」の文法化が進まないのは、こうした認知プロセスに起因すると考えられる。

また、所有表現で使われる存在動詞のうち、be は存在を示すほか、連結詞として用いられ、助動詞として使われるなど文法化が進んでいる。日本語の「ある」は「ーである」という形で連結詞として用いられる。「いる(ゐる)」は「低い姿勢で静かにしている」というのが原義の変化動詞で「立つ」に対する対義語であるが、「ーている」の形でアスペクトを表すまでに文法化している(金水 2006)。コントロール・サイクルにおける baseline 段階は result 段階が定着したものであると言え、これらの存在動詞は定常性を内在するために baseline 段階が焦点化されるか、result 段階の継続を示すことで定常性を表しやすい特性を持っていることから、文法化が可能になったと考えられる。

3. まとめ

以上のように、所有表現に使われる動詞の表現の広がりや文法化はコントロール・サイクルにおける result 段階・baseline 段階の焦点化と深く関わっていることが推察される。従って、result 段階や baseline 段階が焦点化される傾向の強い動詞は、所有者と所有対象との間の目には見えない関係を概念化者レベルで結びつけるのに必要な主観化が可能になり、幅広い所有関係に言及できるほか、文法化も進むということが言える。

<主要参考文献>

- Bybee, J., R. Perkins and W. Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Language of the World*. University of Chicago Press.
- Carey, K. 1995. Subjectification and the Development of the English Perfect. in D. Stein and S. Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*. Cambridge University Press, pp. 83-102.
- 金水敏. 2006. 『日本語存在表現の歴史』. くろしお出版
- Langacker, R.W. 1987. *Foundation of Cognitive Grammar*, vol.1, Theoretical Prerequisites. Stanford University Press.
- Langacker, R.W. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Langacker, R.W. 2002. The Control Cycle: Why Grammar is a Matter of Life and Death. 『日本認知言語学会論文集』第2巻, pp.193-220
- Traugott, E.C. 1989. On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *Language* 65: 31-55.
- Traugott, E.C. 1995. Subjectification in Grammaticalisation. in D. Stein and S. Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*. Cambridge University Press, pp. 31-54